

犠牲の美学  
— 美的価値観念で論じられた愛国心 —

マテイアス・ファイファー

【翻訳】

## 犠牲の美学

— 美的価値観念で論じられた愛国心 —

マティアス・ファイファー

【要約】

二〇〇六年の安部政権の下での教育基本法改正は、メディアでの愛国心論争の主要な理由であったかのように思える。しかし、実際は、これは左右の政治グループ間の、日本のアイデンティティをめぐる長期の論争の、まさに結果なのである。今では、保守勢力に有利に決められたように見える論争である。野党でさえ新法を支持した。その法の主な目標の一つは、「故郷と国」を愛する心を育てることである。冷戦が終わってから、保守側のメディア、つまり、新聞、月刊誌、出版社、それに映画制作会社でさえ、大いに努力して、日本史の視点を批判的なものから肯定的な見方へ変えた。日本史の教科書は、第二次世界大戦が終わって以来、中立の傾向があった。だから、日本の生徒の心に強い影響力を持てるような、明確な見方を欠いていた。

歴史に関する専門的な論議は、ある程度、マルクス主義の学者の手にあった。それに対し、歴史の修正主義者の見解は、大衆に人気あるメディア（コミック、映画、雑誌）を通して表現された。修正主義者の、物語形式で展開された論議では、家族愛と郷土愛のために、自己犠牲賛成の見解が、新しい愛国心構想に重要な役割を果たしている。日本人の大多数はまだ、自衛隊にたいしより積極的な役割を、だから、日本が世界でより強く軍事的に関与することを支持する気持ちにはなっていないけれども、それへの抵抗感はまだより弱くなっている。

グローバル化への不安、反日運動を基にした、中韓での愛国心からの暴動、テロの恐怖。こういったことが、強い修正主義の考えが盛られた、映画、コミック、本が最近の数年で人気がある理由である。

ほとんどの政党にも愛国の新しい教育が支持されたこと、それに反対する影響力のある動きがないこと。それがはっきり示すのは、日本の社会が変わったこと、歴史と軍隊に関する批判的見解は、将来、大多数にはあまり支持されそうもないことである。

### 一 ナシヨナリズムと新しい価値意識の枠組み

日本では遅くとも一九九〇年代半ばから、政治で右派と目される団体や組織、著名人が、メディアや世論を意識してどんどん意見を表明し、論壇で主導権を握り、左派を防戦に追いつめた。冷戦が終わり、社会主義の経済・社会モデルが敗北したことは、全世界での左派の活動に大打撃であった。左翼の主張者たちは、必ずしもモスクワや北京の政治を支持してはいなかったが、それでも、彼らは常に、社会主義先駆者たちの思想に近い立場の考えを宣伝していた。同時にまた、左派の人々が専門語を使って議論する傾向も、政治の理屈にあまり詳しくない一般の人々に考えを広めるのを難しくしていた。むしろ左派が、一般大衆に距離を置くのはまれではなかった。

1 過去数年の論争は、国旗と国歌のような、国のシンボルの法制化でも、靖国神社や新教科書導入でも、みな、国内の保守的民族主義的勢力の主導で行われ、たいてい彼らに有利に決定された。左翼の抵抗はあったが、国家の新たな理解のための論争は開始されなかった。

右派の論議は、平凡な言葉や激しい調子の言葉を平気で使う。それが、彼らの言葉の本質といえる。選ばれた人を相手にするのでなく、大衆的であるのが右派運動の基本姿勢である。しかし彼らは、戦後は民主化や経済復興が優先された状況下で、みじめな生活をおくらねばならなかった。吉見俊哉が示したように、日本では一九八〇年代まで、国粋主義的論争がなされていた。特にそれは、同じ考えの者たちの間でのことだった。こうした人々は、関連する雑誌で意見を交換していたが、大きな影響力を持つことを期待できないでいた(吉見2003年[58,59])。

ベトナム戦争は、アメリカタイプの「第二次世界大」戦後帝国主義の原罪である。この戦争がもたらした結果は、左派の市民運動・学生運動がモラル面で指導権を要求できると考えたこと、また、大学で地位を確立しつつあった左翼エリートが優勢になったことである。

これにたいして、ベルリンの壁崩壊後は、右派の議論には、いわば「ヘコペルニクスの転回」があった。彼らはメディアを使い、例のない攻撃に出た。『正論』や『諸君!』のような右派のオピニオン雑誌は、それまでみすばらしい不毛な存在だった。それが、一流雑誌に変わったとはいえないものの、挑発的な見出しと読みやすい記事でより目立つようになった。

その他にも、大判の雑誌『SPA!』や『SAPIO』が創刊され、わりと若い層を対象読者とした。それらでは、右派

の政治課題は雑誌での視覚面を重視し、また、注目を引く人物を取り上げて（テレビ俳優のインタビューなど）時代に合わせて仕上げられた。

こうしたメディア攻勢が最初の頂点を迎えたのは、一九九八年だった。この年に、映画会社東映が「プライド―運命の瞬間<sup>2</sup>（とき）」を上映した。国防大臣であり、後の日本の内閣総理大臣（1947年―1948年）東條英機は、アジアでの戦争遂行と戦争犯罪の最高責任者として、東京裁判後一九四八年に絞首刑となった人である。この映画は、その彼を善良な父親、責任感にあふれた政治家・愛国者として描いている。

同じ年、出版社の幻冬舎が、右派的考えの漫画エッセイストこばやしよしのりの戦争論<sup>3</sup>三部作の第一部を発行した。彼は、アジアでの戦争に対して、断固、肯定の態度を取り、若者たちに愛国の姿勢を求めている。

2 「とき」は「瞬間」に対する特別な読み。

3 日本語の原題は、クラウゼヴィッツの「Von Krieg」の邦訳タイトルと同じ「戦争論」である。

これら二つの作品が画期的なのは、ここで、その時までには極右少数である人々の問題群が、ポップスやテレビと並んで、多分、最も人気ある娯楽メディアである映画と漫画を使い、広く大衆に向けて発信されたことである。特に劇場用映画は、人、技術、金銭の経費によって、おそらく、

一番困難なメディアであり、製作段階から多くの社会集団の支援を必要とする。さらに、当然、映画はまず儲からなくてはならない。東映の責任者が、日本の雰囲気や正しく判断したかのようである。この映画が左派インテリから修正主義的であるとして批判されても、憤慨の嵐や拒否といった反応は、一般大衆では見られなかった<sup>4</sup>。

4 これに対するまったく別種の反応として、一九九五年に香港と中国で製作された映画「南京一九三七年」が、同じく一九九八年に日本で上映された。右翼は黒い街宣車で、「南京一九三七年」を上映敢行した、小さいが、政治に進んで関わった映画館の周りを走り回り、拡声器で経営者を中心に傷つけた。館内では、この映画に反対する者たちが上映中ナイフでスクリーンを切り裂くなどの騒ぎが起きた。映画を見るのにポディーチェックを受けねばならないという、筆者にとって最初にして唯一の体験であった。

逆に、この映画は興行で成功を収め、第二次世界大戦の「英雄たち（主人公たち）」が賞賛される一連の映画の始まりとなった。

「男たちの大和」（東映、2005年）では、戦艦大和の沈没の様子が描写され、「出口のない海」（松竹、2006年）では、人間魚雷「回天」の操縦士たちが中心にいる。二〇〇七年夏には、ついに特攻隊をテーマにした最新映画「俺は、君のためにこそ死にに行く」が、これも東映から公開された。

5 ただし、この作品は、大衆の好みに合わせた東映映画よりも、松竹のたいていの作品（「ソナチネ」、「うなぎ」など）と同様、様々なニュア

スがかめられていると言わねばならない。

この映画のために、石原慎太郎東京都知事（作家、芥川賞受賞者、ナショナリストを公言）自らが脚本を書いた。自身の言葉によれば、このテーマは彼にとって非常に大事なものであった。

特攻隊員から母のように慕われた鳥濱トメさん。彼女に打ち明けた若い人たちの真実。この素晴らしい人たち（美しい日本人）の姿を後世に残しておきたい。<sup>6</sup>

6 映画の初めの導入の言葉

ここでも、安倍晋三前首相の著書『美しい国へ』の表題と同じ言葉が出てくる。この「美しい」という言葉は、前首相が一時期、演説で頻繁に用いていた。石原がこの言葉を、こういう無防備な状況で用いた（前出の映画宣伝ですでに使われた）ことは、偶然ではないだろう。

その言葉は、「品格」という言葉とともに、アイデンティティ、社会、過去の克服に関する日本人論議で、目下、優勢な宣伝文句である。この日本人論議は、政治、社会、歴史の事実関係を美の見地から評価する傾向がますます強まっていると気づかせる状況である。ただし、既述のように、サブカルチャー（映画、漫画、雑誌）というメディアに関する論議では、一九九〇年代以降、視覚化が強まってきたので、無論、このことは一貫している。

モリス・スズキが述べたように、「論争のダイナミズム（中略）は、非常に特殊な、感情に訴えるような、民族、歴史のテーマでは、突然に段階的に拡大激化して、それが社会全体の論争になる」傾向がある（モリス・スズキ 2003年29）。

特定の主題について、ほとんどメディア内だけで行われた論争は、一定時間しか続かない。それは、事の本質からして当然である。けれども、この議論のさまざまなきっかけは、全く注目されていない。それは、ほとんどどまることのない西欧化に直面したときの、日本人のアイデンティティ保持をめぐるなされた、遅くとも明治時代から続いている論議が、無視されているからである。だから、通常、政府が与える次のきっかけが、押し寄せるグローバル化に対抗しての、日本独自の特性維持をめぐる激しい議論を、再び呼び出すだろう。モリス・スズキがさらに述べるように、潜んでいるのは、

しかしながら、こうした個々の論争の背後には（中略）大変多くの広範囲な問題、つまり、歴史的真理と歴史的妥当性という本質の問題だけでなく、現代世界での歴史の意義と、社会での役割の問題がある（2003年29）。

## 二 教育目標としての愛国心

そのような論争の一つが、近々行われる教育基本法の改

正をきっかけに行われた。これは最終的に二〇〇六年一月二二日に国会で決議された。特に自民党の主導により、教育基本法第一章第一条、第二章第五条で、教育目的の表現の変更が明確にされ、この目的に関する激しい議論が始まった。第五条は次の通りである。

伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。<sup>7</sup>

7 日本政府ホームページ上の原文。

「愛国心教育」とも呼ばれる第五条は旧法にはなかった。愛国心教育は、保守派が長い間要求してきた。最終的な文言は、まだ穏やかなものであった。しかし、議会外の左派には、石に刻まれたように動かしようのない〈枠組み右転換〉を意味した。彼らはメディアを使って努力したが、実を結ばないことが分かった。

8 例えば、左翼運動の伝声管である、月刊誌『論座』（朝日新聞社）や週刊誌『週刊金曜日』。

興味深いのは、野党がその文面だけに異議を唱え、内容自体は問題にしなかったことである。反対に、各野党は国民から愛国的でないと思われなかったために、建設的提案を持ち出し、遅れをとろうとは決してしなかった。民主党幹事長の鳩山由紀夫は、愛国心をテーマとした討論の場で、「民

主党の提案は『国を愛する心を育てる』（文芸春秋2006年95）というものだ」と語る。そのことだけでも分かるのは、日本で政治の雰囲気が変わったことである。

法改正で使われた「郷土、国、愛する」という言葉は、要するに、「愛国心」と言う言葉を避けようと頑張った結果である。愛国心は、過去にあまりにも頻繁に使われ乱用された軍国主義スローガンであり、否定的な意味を含む。

安倍首相自身は、『美しい国へ』でナショナリズム<sup>9</sup>を使っている。

9 ある箇所 (p.88) で安倍は米国へ渡ったイタリア移民への言及で、日本語では一般的でない「母国愛」という言葉を使っている。理由は不明。

藤原正彦は著書『国家の品格』で祖国愛を選び、こぼやしよしのは愛郷心<sup>10</sup>を、特に、彼の雑誌『わしづム』（21号2007年）ではっきり支持している。

10 ドイツ語の「Lokapatriotismus」は「度を越した郷土愛」といったわざとらしいニュアンス（今では前ほどではないかもしれない）があり、そのために、日本語の等価とは筆者は考えない。さらに日本語の「愛郷心」には「郷土愛の上に建てられた愛国心」の意味でさらに別の意味を含めて用いられている。「郷土愛」はここでは概念として不十分である。

論争の概念定義が錯綜しているので、適切な用語を見出すのは、容易ではない。概念の多くが西欧語の訳であり、なお別の含意とともに用いられているからである。ドイツ

語ではPatriotismusとNationalismus（そのヴァリエーション）のChauvinismusを含め<sup>12</sup>）が比較的明確に区別された概念である。日本語の方では、Nationalismusにたいしてナショナリズム、国家主義、民族主義、国民主義があり、Chauvinismus（またはUltra-Nationalismus）には国粹主義か偏狭な愛国主義が、Patriotismusには愛国心が使われている。しかしこれらのたいの概念は、今ではタブーの語となり、さらに上記で挙げた概念の三つ、ナショナリズム、祖国愛、愛郷心だけが時の試練に耐えて生き延びたか、少なくとも戦争で傷ついてはいないといえる。しかしその場合でも、種々の現象の学術的描写と、政治論争でのキーワードまたは手ごろなスローガンとしての使用は、やはり区別せざるを得ないだろう。

### 三 人間の本性としての愛国心

故郷と、<sup>11</sup> 固ないし国家との関係が、愛国心論争の中心にある。数学者藤原正彦は、その二〇〇五年のベストセラーで比較的シンプルな公式「家族への愛↓故郷への愛↓祖国への愛↓人類への愛」を出した。ここでは、次のより高い段階へは自動的に前の段階から出てくるという。つまり、家族への自然な愛情で始まり、それは最後には当然のように理想的な人間愛へと至る（藤原 2006年111）。

11 日本語ではほぼ同義語として用いられている。

12 通俗科学に由来する、右派の日本論議では、専門外の分野での密猟傾向がある。世間周知の「新しい歴史教科書を作る会」が作った歴史教科書では、明らかに漫画家のこばやしよしのりが、第二次世界大戦部分の執筆を担当している（参照 Berndt 2003: 211）。歴史家でない執筆者は少なくとも注目に値する。

13 この本は二〇〇五年新潮社より刊行され、実用書部門での戦後最高のベストセラーである。朝日新聞によれば（2006年5月12日）、それまでに二百万部以上が売られた。

この自然な関係を政治家安倍も断言するが、その際、彼の議論は一種の循環論法に陥る。一方では著者が一例を手掛かりに示すのは、異国に住む人々の場合に、同郷の者との付き合いを通じて故郷への憧憬が呼び出される様である。けれども、この「素朴な愛着」の根本原因は、その国の歴史、伝統、文化を持つ、故郷とのつながりに見られる。したがって、国にたいする感情がまず先にある、故郷への思いに流れ込む（安倍 2006年91）。

安倍の郷土愛と愛国心を同一視する試みには、反対意見が出されずにはすまなかった。愛国心・愛郷心に関する会合で、こばやしよしのりが招いた参加者がいだいた疑いは、次のようなものだ。つまり、安倍のように、東京生まれか、大学入学以来東京に住んでいる人々が、どのていど、首都中心の社会での郷土愛が、実際に国全体での愛国心の土台となりうるか。例えば、憲法学者の八木秀次には、故郷と

は子ども時代の思い出であり、したがって懐かしく思う気持ちであり、愛国心とは関わりのない(わしズム2007年65)。  
この点で、八木は、安倍、藤原、こばやしとも立場が違  
う。この人たちは、程度の差はあれ、正直に、懐かしく思  
う気持ちを愛国的なことを考える際の基本としている。ナ  
シヨナリズムという語を言語的・歴史的根拠を安倍が説明す  
るとき、それは明確になる。

14 日本語では「懐古」、「懐かしさ」、郷土との深いつながりを持たせれば、「郷愁」。

それによると、いろいろな地域出身のイタリヤ人がポロー  
ニヤ大学で勉強した。そこでは通用語がラテン語だったの  
で、それだけに、故郷の言葉で談笑できる同郷の学友と会  
えて喜んだ。言葉と共通の出自で結びついた学友の姿で、  
遠い故郷がまさに具体的なものになる。そのことで、故郷  
への憧れの感情が世に認められるようになった(安倍 2006  
年91)。ラテン語の *natio* の、いつもは普通な説明とは一つ  
二つ異なる点は別として、安倍にとり故郷との結びつきと  
は、記憶によって成立するものであることがはっきりして  
いる。

藤原は同じように考えて、懐かしさを、家族、故郷、日  
本への愛を基本にしている(藤原 2006年111)。こばやし  
では、懐かしく思う気持ちは、最後に、完全に悲壮なポー  
ズになる。そのことは、彼の雑誌『わしズム』の表紙にはっ

きり現れている(2007年21号)。そこには、こばやしの自  
画像が見られる。アンダーシャツで半ズボン、稲田の真中  
でサングラス履きで立ち、右手には虫補網、左手はこぶしを  
握りしめ、背中には麦藁帽子。肩には日本の子どもたちが  
捕らえた虫を入れる虫かごがかかっている。背景には高層  
建築、作業中のショベルカー、日本の政治家たちの何人か  
の顔、その中で一番大きいのは安倍元首相である。

こばやしの視線は、ちょっと上を向いており、涙がぼろ  
ぼろと頬をつたうのが分かる。この絵全体が、見る人に  
「なつかしい」<sup>15</sup>という言葉を文字どおり叫びかけており、ま  
さにこの感情を、故郷を離れて大都市で働く、特に男性読  
者に、呼び起こそうとしているのである。そのこぶしは、  
地方とそこの地域共同体での経済縮小と破壊に対し、戦う  
覚悟を示している。彼の考えでは、その責任は日本政府が  
支持するネオリベリズムにある。

15 簡単に翻訳できない日本語。対応する含意を含んだドイツ語の形容詞  
*wehmütvoll*、*sehnsüchtig*、*nostalgisch*が、関連辞書に翻訳案としてあ  
る。しかし、子どもの時に身の回りにあったものや雰囲気に対して、自然  
に浮ぶ感情を表す表現としては、みんな適当ではない。ドイツ人なら、似  
たような状況では、「昔を思い出させるなあ・・・」というであろう。た  
だし、日本語がもつような感じは必ずしもないことは明らかだ。

先に述べた議論でのゲストたちには、対話で明らかにな  
るように、こばやしが新たに見つけた、郷土への感情を同



じくすることは難しかった。彼は、大都市に住むのは一時的なことと呼び、大都市住民が、胸の奥では、故郷を離れたことを裏切りと感じるだろうと、想定している（わしズム 2007年66）。対話のゲストが認めたくはなくても、これは多分、心理的に当たっている観察だろう。

しかし、出てくる問題は、それを政治で利用できるのか、すべきなのかである。政治学者の姜尚中<sup>かんしょうちゅう</sup>が正しく見て取っているのは、日本での新しい愛郷心が、長年、故郷に背を向けてきた人々、とりわけ、この人々に最も声高に主張されていることである（姜 2006年147）。もちろん、これは珍しい現象ではない。

郷愁は個人の基本的欲求である。実際の故郷がないことは、結果として観念の故郷を作り出すことになる。このことを、姜の考えとともに基礎に置かならば、例えば、次のことが理解できる。ヨーロッパでは、移民で住み始めた外国人の数がますます増えている。彼らが、なぜ親の故郷と文化を美化し、彼らを対等な人として受け入れていない異国で、故郷と文化をアイデンティティの基礎にしているのかである。姜尚中の論理をまったく別のレベルで理解すると、こうなる。大都市という怪物東京で権力という、認識が容易でない中枢に身を置いた立場から、国の内外で国家の繁栄を気にかけている政治家たちには、郷土愛が失われたか、あるいは、彼らは、都会に生まれた人として、一度もそれを持ったためしがなく、アルキメデスの点（アルキ

メデスははこの原理を発見し、「われに立つ場所を与えよ、さらば地球を動かさん」と言ったという話がある）に対する憧れをいいただいでいるのである。

このことが、いよいよもって当てはまるのは、世界的にネット化された経済システムの中で、政治が民族的nationalな意味を持つことへ及ぼす影響が、どんどん弱まっているグローバル化された社会である。

#### 四 民族主義的nationalな

##### 動員するメディアであるテレビ

安倍は、「世界市民」という概念を無愛想に拒否する。藤原は、単一文化の世界という恐ろしいビジョンをいいただいでいる（藤原2006年138以下）。こういうことは、政治、経済、学問で、民族的なものNationalの意義が、失われていることから生じるものである。「国のため」に何かをするという感情にひたれたのは、たぶん間違いなく政治家であった。

けれども、そのことに支えられたアイデンティティは、経済や国際政治の類の決定に影響力がますます低下している状況に直面していると幻想と感じられる。そういうことで、グローバル化に、十中八九、何とか対抗でき、アイデンティティ確立で有効になりそうな分野が求められる。それにたいし、まさにうってつけなのが、歴史と故郷である。

歴史は国の財産であると理解され、日本では日本史と世

歴史を厳格に区別している。これらは授業も別々で、大学入試では生徒たちは通常、どちらかを選択して受験する。

故郷は、一般に、子どもの時を過ぎた場所と理解されるので、故郷も、場所としてよりは時間は時間、それも、自身の過去という時間、逆に過去に向けられた投影である。したがって、民族主義者Nationalistの意見によれば、ここに、日本人の共通のアイデンティティの根源が見られるべきであろう。日本人が世界で生き抜くには、再び、そのアイデンティティを意識しなければならない。その際には、アジアの隣人に特別の関心が払われる。

二〇〇五年に中国で反日デモが起きた。韓国と中国が、当時の小泉首相の靖国神社参拝を修正主義的であると批判した。北朝鮮という潜在的な脅威。特に、過去何年かメディアで、最も重要な、民族のnational意識に関わる問題のひとつと見られた、北朝鮮特殊部隊による日本人拉致事件。これらは、一九四五年以後、前例がないほど、日本人の民族national意識を感じやすくした。

ナショナルリズム研究者である吉野耕作が、朝日新聞とのインタビュー (2007年2月28日朝刊) で言うのは、愛国心という形での商品を見分け、それには消費者の需要があり、商品化の提案を行ったのが、メディアと広告代理店だったことである。日本の政治は、すでに走っているこの列車に乗っただけだと。

疑いもなくメディアは、特に、拉致被害事件、長年北朝

鮮で引き留められた被害者の帰国、北朝鮮のミサイル実験に関する報道で、大きく関係した。何にか? 「バブル経済」が終ってから、日本人の心にある危機の感情を具体的な恐怖感に高めたことである。

そして、歴史で証明されている事実は、民族は共通の敵<sup>16</sup>によって一番強く団結することである。

<sup>16</sup> そのことを、ヨーロッパでの民族主義運動の歴史、冷戦、中東での紛争も示してきたし、また示している。

憲法学者である八木も、その意味で、民族主義的nationalアイデンティティを作りだすために一番重要なメディアはテレビであると考えている(わしづム 2002年21号68)。しばらくの間、実際、ほぼ毎日テレビ画面に映る、帰国者たちの涙を抑えた記者会見や、放送局がこれらの人々(と拉致被害者家族や異郷で死んだ人々)をめぐってつくり上げ、彼らを、涙をそそる手軽にまとめられたミニドラマとして日本人の居間に送るストーリー。これらはその効果を発揮し、実際、感情面での民族主義的national動員という業務へ、メディアが政府を追い立てていると思うこともできるかもしれない。

## 五 情動の論説

そのため、安倍が著書『美しい国へ』で、テレビ放送さ

れ映画で上映された、基調が愛郷心である出来事をはっきりと引用していても、誰も変に思わない。他方で、当然出てくる疑問は、政治家が、政治の議論する代わりに、自分の政治的見解を支えるために、よく知られた映画を引っ張り出すとすれば、彼は何を目的としているのかである。

トップの地位にしようとするか、その地位についている政治家が、大衆性をアピールしなければならないのは、自明である。クリントン元大統領の好物はハンバーガーだった。日本社民党の元党首の土井隆子はパチンコ好きと公言していた。息子のほうのブッシュは、牧場でカウボーイ姿を見せ、小泉元首相は、ロックが大好きな若いファンとしてのイメージをアピールしていた。安倍元首相は映画ファンであると振舞った。しかし、安倍は、小泉元首相以上に進み、庶民的な、胸にジーンとくる話題、特に家庭内の話題が中心の映画をよく見ると公表して、前任者小泉に比べてあっさりした自分のやり方を補おうとした。

彼の政治の基本姿勢が、まず情動を土台にしているという印象は、著書のあちこちで見られる。それは例えば、学生運動が盛んだったころ、左派の教師に対する個人的反感に由来するという、自分の保守的姿勢の由来を明かすようなときである。

安部の祖父、岸信介(1896-1987)は、東京裁判でA級戦犯として有罪とされた十九名のうちの一人である。しかしそのことは、岸の政治家としての輝かしい経歴(首相、195

「年—1960年」を傷つけなかった。この事実も、若い安倍に彼の言葉によれば、後まで影響した。それは特に、祖父が、学生運動中とその後も受けていた、身体へのおどしにまで達するほど敵視されたことによるのだった(安部2006年21以下)。

姜尚中は、倫理的信条を正当化するときに、感情で動機づけられた諸価値が、現在の議論で果たす役割に注意を促した。価値が感情で動機づけられていることは、藤原ではそうであろう。だが、小泉の場合もそうである。彼は、靖国神社参拝を「心の問題」と説明した(姜 2006年35)。

しかし、付け加えられねばならないのは、小泉が、多分、意識的にいわゆる「富田メモ」を引き合いに出したことがある。富田メモとは、昭和天皇の下で宮内庁長官を務めていた富田朝彦が、なぜ昭和天皇が靖国に行かなくなったかの訳をメモしたものである。それは、有罪判決を受けたA級戦犯(東條英機を含む)を合祀し、国の英雄として祀るとする、一九七八年の靖国神社の決定だった。

昭和天皇は自分の決心を「だからわたしはあれ以来参拝していない。それはわたしの心だ」と説明したという。メモの信頼性が、今日まで、左派と右派の間で激しく議論され、予測できる立場と議論の場での緊張があった。しかし、小泉は、故天皇の言葉とされる「心」を、自分に有利になるようにたいへん巧妙に用い、それで、その言葉を正当であると認めた。

「それが天皇には、心の問題だったならば（それとともに、政治的判断ではない、と小泉は言いたい）、彼は、その権利を首相としての自分にも要求できる。」<sup>17</sup>

靖国神社を依然として修正主義の象徴である<sup>17</sup>とみなす、中国、韓国、日本の左派知識人の反応があっても、これはもちろん、神社を政治から切り離し、単なる宗教的祈念を行う場所にしたという政府の意向にたいへんよく合う。

17 そして、神社の隣にある「遊就館」が十分すぎるほどはっきり示しているように、靖国神社は修正主義の考えの象徴でもある。日本の降伏の日、八月一五日に靖国を参拝することが、先入観のない参拝者すべてに証明することは、この神社が極右の最重要な象徴であることである。彼らは、その日に、時代遅れの古参兵らと戦闘服に身を包み、神社の周囲に群がる。周辺での何台もの黒く大きな街宣車、対立するグループとときおりの争い（警察とも）は言うまでもない。政治家が出入りする裏門は、メディアや野次馬根性の人で包囲される。

朝日新聞の代弁者が民族の裏切りもの（非国民）とののしられ、「すぐに朝鮮へ帰るべし」とされることもまればない。首相が靖国参拝でこうした考えをすばらしいものとしている事態は、理解するのがなかなか難しい。

ベストセラー『国家の品格』の著者の場合も、感情の激発が考察の出発点である。アメリカでしばらく研究してきた藤原は、帰国者の、典型的なカルチャーショックの犠牲者となった。所属大学の専門領域会議で驚きとともに確認

しなければならなかったのは、アメリカでは当然の、立場をはっきりさせ、対決して行なう意見表明という論争が、日本では機能せず、彼は偏狭であると解され、アウトサイダーにされてしまったことである。

その体験で、この学者は、考えを根本的に改めるに至った。彼の著書は、西欧流の合理的思考に反対し、感情に基づく、日本人が社会生活を営む上での相互作用に賛成するものとなった。

『国家の品格』は藤原が日本で行った講演記録を集めたものである。その講演スタイルは同書でも基本的に保たれており、それがおそらく意外なほどの成功を収めるのに特に役立った。簡単に短い文、印象的な比喩、気のきいた言い回し、一部には自分を皮肉る言葉。その主張は挑発的に表現され、明白な論拠で支えられている。その論拠は、聴衆や深く考えない読者の場合、説得力があることを納得させ、影響を後に残す。

普通、当の本を一回読んで終わりにする平均的読者には、その本は理想的である。読者は、大量の思想と情報を、分かりやすく提供してもらえ、日本文化の何か基礎的なことを学んだという気持ち浸れるからである。

さらに、日本文化についての引用も（もっと良く言う<sup>18</sup>と、賛美）、例外なく外国作家や著者の知人によるものである。その結果、聴衆や読者は、自分に提示された世界像を、いわば世界的に証明された<sup>18</sup>とみなすことができる。

18 同時に確認せざるを得ないのは、藤原がその反西欧の論説を、完全にまさにその西欧の知的権威を引用して支えるとき、著者の心理がいかにひどく苦しんだに違いないかである。西欧の鏡は絶対に必要なのであり、日本の思考が優位であると宣伝されてきた、その優位の根源を、すなわち、根強い劣等感を指示している。そうでなければ、なぜ西欧によって、自分が正しいことが証明されなければならないのか。

## 六 帰属という神話

安倍と同じく、藤原が語るときの方法には、ロラン・バルトが神話について述べたことが当てはまる。

読者が神話を無邪気に消費できるのは、読者が神話の中に、記号体系を見ておらず、帰納的な体系を見ているからである。等価物しかないと、読者は因果関係の過程のようなものを見ているのだ。(バルト 1977年115)

右派のジャーナリストが計算に入れているのは、ちょうど、大衆のこのナイーブな点なのである。日本の民族共同体が、前に(つまり西欧化以前に)どのようにして成り立っていたのか、という彼らの神話構想を促進するためである。現在の論争を特色づけるのは、メディアを考慮した演出である。つまり、メッセージが、「読みやすい」映像に包まれるという、視覚的なことが優勢な点である。すっか

りメディアが行き渡った社会では、記憶に残る映像は、勘違いされた現実の模写の方である。そちらのほうが、嘘をつくの簡単に役立って変わりやすい多量の言葉よりも、信じられやすい。

けれども、映像も嘘をつくことがある。その最も単純な形では、我々に一定の現実をあるように思わせる、撮影角度、トリミングという洗練された形式での、写真のモニタージュである。しかし、映像では、必ずしも、その本当らしさという中身ではなく、むしろ、そこにある真実らしさという中身が重要である。

現実とは、過ぎ去ったこと、ある特定の時間にある場所に存在し、我々がいつも、だいたい追体験できる現実世界のことである。それにたいし、真実とは、社会のメンバーが、それに基づいて、歴史の特定時点で了解し合わなければならない認識である。

現実を変えられない。現実とは、そうであるようにあるが(あるいは、そうであったようにあった)、それになりたい、真実は変わりやすく、交渉可能であり、だからたえず激しい議論の対象である。映像は、原則的に、一定の見方をしていることが分かる。また一方では、真実を求める要求を表現している。

バルトによれば(バルト1964年123他)、映像に姿を見せる神話の不誠実さは、神話が、本来、歴史に根拠があるものなのに、自然であろうとする、その全体主義的な要求で

ある。新しい共同体感情を宣伝する者たちの、歴史に立脚しない思考では、まさに、この自然または自然さの概念が優位を占めている。

安倍や藤原には、郷土愛と愛国心の間に自然な関係が存在する。彼らの考えでは、一つが当然のようにもう一つから生じる。この二つの着想（すなわち郷土愛と愛国心）の関係にとっての重要概念は、帰属である。

安倍には、帰属の問題は単純である。彼はそれを第三章の「郷土愛とは何か」で、遠藤周作の小説『沈黙』（1989年）の決定的なシーンによって説明する。ここでは、イエズス会士セバスチャン・ロドリゲスが、描かれたイエス像を踏み、そのことで、信仰を否定するか、信仰のために死ぬかの選択を迫られている。ロドリゲスは生きることを、宗旨仲間を救うチャンスを選び、信仰を否定する。安倍がそこから引き出す結論は、二つの可能性の間で選択することは避けられないことであった。つまり、一方の可能性に決定し、その際もう一方を放っておくことである。唯一のものを運び取り、その他はすべて排除することは、なにか特定のものへ帰属していることの特徴になっている。「それは、決定対象にたいする自信と責任という結果になる。この対象が、愛し、守りたいと思う組織であり地域である。そうして愛着が生まれる。」（安倍 2006年93）

ヨーロッパ人であるキリスト教徒が、拷問の後、二つの悪のうちいずれかを選ぶしかなく、恥辱の方を選ぶ。遠藤

の傑作中の、他ならぬこの場面を取り上げたことは、当然、日本での武士の伝統を背景にして考えられねばならない。日本の武士であれば、恥をさらすよりも信念から死を選ぶであろう。これは日本の読者なら問題なく連想できる。

だからこの場面は、他の可能性をみな排除して、選択が必要なことを分かりやすく説明していることが、簡単に見て取れる。より深いレベルで考えると、この選択は、その当然の結果を、それと共に、日本人の考え方の純粹さを暗示している。それでも、自問しなければならぬのは、二十一世紀の日本人が、実際、「死か永遠の恥か」という選択肢とに直面させられるだろうかである。おそらく、そういうことはほとんどないと考えるべきだろう。

だが、忍び寄ってくる予感、日本の将来において、同じような難しさの決断に迫られるという結果になることである。少なくともそれは、安部や「美しい日本」を先に考えていた人たちの思いどおりに行く場合である。

## 七 「他の者たち」の排除

姜尚中は、かつてない程に移動性が特色である現代社会に対するこの精神的姿勢を、時代錯誤であると批判している（姜2006年195）。安倍や藤原、こばやしの著書は、広範囲に読まれることを目指している。それらと異なり、姜の本は科学の原理に基づいた著書である。それでも、非常に

個人的な著書である。それは、著者の伝記部分のせいである。

姜は、一九五〇年に熊本で、朝鮮人を両親として生まれた。両親は、日本が朝鮮を植民地支配していた時代に「日本国民」として日本に移住した。たいていの朝鮮の人のように、姜は日本名（永野鉄男）を名乗っていたが、ようやく一九七二年に朝鮮名（カン サン・ジュン）のためにそれをやめ、同時に南朝鮮（韓国）国籍を取得した。

外国人の身分に意識して決めること、一度も暮らしたことがない国の国籍を選ぶことを、意識して決めることは、一方では個人的な決心であり、また、政治的な決心でもある。日本で移民の背景を持つ多くの恵まれていない人々と違って、たとえ姜が、知的エリートに属するにせよ（彼は東京大学教授）、若い頃にはやはりアイデンティティ喪失の段階を修了した。それは、出自の拒否、すなわちその最終結果では自己否定である。親が別の文化に属している人間には、帰属ははっきりした問題ではない。帰属は、「公言」によってただちには解決されえない。姜もまた、南朝鮮国籍を選んだからといって韓国の愛国者にならなかったことは、はっきり分かっている。しかし、彼はこの決断によって、後からだが、両親とその文化を公平に扱う。そういうことで、彼は率直に、自分がはざまの存在であることを認める。彼は生きてきてずっとそうだと感じてきた（姜2006年196—197）。

このことと共に、当然、ふたたび、安倍の厳格な「二君に仕えることはできない」という愛国心にたいする疑問が出てくる。姜のような人間がもっている精神状態では、愛国の気持ちや、ある国、ある文化を感情面で好むことはできず、通常は必要でもない。国際スポーツ競技で、どちらかへの自然な優先が突然現れるのは確かである。しかし、「自分の」国が勝つのを見たいから、という面は少ないであろう。なぜなら引き裂かれた人には、この国というのはないからだ。

別の考えられる場合は、徴兵制である。これは、おそらく、世界中の愛国者たちの頭の片隅で亡霊のようにつきまとっている事例であろう。これはトルコやドイツのような兵役の義務のある国では、一八歳以上の男に対し、たとえ彼が、文化のはざまにいる存在であると感じていても、決断を迫る。

多くの国が、新たに国籍獲得を申請する時に、申請者が元の国籍を放棄し、無条件に、自分で自分に新たな文化の理想を処方することを求めるのは、この理由からだけではない。ドイツでシュレーダー政権の始まりに見たように、二重国籍は、非常にきわどい、感情に支配されがちなテーマで、右派の大衆扇動政治家たちに簡単に世論操作に利用されうる。

日本は、外国人比率が一パーセントを少し超えるあたりである。この状況は、ドイツで数年前に人々が行った白熱

した論争からは何光年もかけ離れている。地方選挙での外国人参政権については何年前かに論じ始められた。その後ふたたびすばやく報道から消え去った。二重国籍、移民法、国籍法の現代化のようなテーマは政治日程に上がっていない。

今なお、*ius sanguinis* (血統主義) が生きており、それは、日本国籍の取得時には日本名を用いる義務と同じように、近い将来にも変更はないであろう。少なくとも外国人登録証の指紋捺捺は、二、三年前に廃止された。しかしバイオ認証パスポートの時代に、それがまたすぐ変らないと誰が言えようか。

現在の愛国心論争で気の抜けた味わい以上のものを残すのは、この論争につきまとうている民族主義的・国粹主義的な論調である。出発点であるのは危機の感情、個人的な不安感、あるいは孤立感である。それらが、はっきり分かる価値基準のない、見通し不能となった世界では、自分の方向確認への、定義しがたい欲求を、経済目標のあなたにある共同体への欲求を呼び出す。そして今では、郷土愛にもとづく共同体の感情によって、父なる国家の庇護の下、失われたアイデンティティを、すなわち、藤原が書くように、西欧化によって破壊された日本の国民性を再び取り戻させようとする。

安倍の排除の原則が、ここでも浮上する。過去とは、安倍の場合には1950年代から東京オリンピックまでで藤原

や他(影響力のある作家司馬遼太郎など)の場合は、明治時代の国家である。そういう過去を呼び出すことは、文化的にさまざまであるものに発展の場を許さない。その生存権を主張できそうな、わずかな隙間さえも決して与えない。優越を感じる伝統は、伝統を進んで無条件に支持しない者を排除する。そして、その人が甘受しなければならぬのは、東京都知事のような人々から公然と、「怪しげな外国人が出てきたね。生意気だ、あいつは」と侮辱される(姜 2006年204) ことである。

## 八 市場原理と社会での孤立

日本のアイデンティティ破壊は、外からのしわざだ。異口同音にこう主張するのが、姜が論争調で誇張して呼んだ「保守的な文化自警団」(同20)である。悪事を働いた主犯は、まず驚かせるであろうが、市場経済である。その予断をもたない観察者として、わけなく受け入れられるであろうことは、市場経済が日本の経済成長を促進したことである。しかし市場経済は、個人尊重の教育原則とともに、日本で現在の社会問題としてあるすべてに責任があるという。すなわち、家族の崩壊、教育レベルの低下、若年者による高い犯罪発生率、汚職などに。

藤原には、市場原理は—そしてここで彼は、世界に広がる反グローバル派の戦線に加わる—グローバル化、つまり



アメリカ化と同義であり、民族の文化的価値、自然に発展した社会構造、最後には国家の尊厳を破壊したと主張する(藤原 2006年5、135等)。

安倍もこの合唱に加わり、数十年も経済を優先してきた裏に、すべてを支配する効率化の原則のために価値崩壊を見分ける。効率化の原理の背後で、家族、故郷、国が、まず、二次的な位置に格付けされると考へる(安倍 2006年29)。

こばやしには、ネオリベリズムは「牛をかつかた興奮させる」(赤い布)である。彼の意見では、それは特に、改革、すなわち、日本における民営化熱中症の小泉首相の下で、ネオリベリズムは猛威を振るったという。

郵政改革は国民の半数以上が歓迎した。二〇〇五年の前倒し選挙では、その成功に小泉の政治的将来がかかっていた。国立大学法人化は、国がひっこみ、国立機関が、彼らのところへ来る市民を、わずらわしい陳情者としてでなく、客として見ることを証明させようとした。

19 それにもかかわらず、依然、財政的な自立からははるかに遠い状態である。

政治家にとって簡単なことは、国の官僚主義に対する、一般人の先入観にすり寄り、納税者である市民の側に立ち、これまでは解雇することのできなかつた、安定したいい給料を得ていた公務員を、職の不安定が高まった時代に公然と非難することである。このようなやり方で、政府はスリ

ムな儉約の国家財政をアピールできる。市場に自己調節力があるという神話や、経済にとって良いことは、誰にとってもためになる、という希望。これらは、今なお告げられるメッセージである。

しかし国家が公共から身を引き、国民に強く自主性や自己責任を忘れないように注意を促せば促すほど、国民の抱く印象は、新たに獲得された自由の裏側は、社会的主体の孤立化が深まることである。

そのことで、逆説的な反動が生まれる。すなわち、国家が公共から撤収すればするほど、同時に、ますます強くなるのは、「国家へ向う求心力」(姜 2006年26)。それはとりわけ、外にたいしてよりも、心の内でより多くの安心が欲しいという気持ちに関係してそうなのである。

20 「自己責任」という言葉は、政府の警告にもかかわらず三人の若者たちがイラクに赴き誘拐された二〇〇五年に、日本社会で人口に膾炙した言葉となった。政府の対応にたいし批判的な意見を表明する彼らの家族。ボランティア活動家の若い女性が、解放後、またイラクへ行くこうとした意志。これらのことが、若い人々とその家族の無責任な態度に政府が批判的なことを述べるきっかけとなった。それが〈鞭打ちの刑罰〉の始まりとなり、メディアがそれを家族を相手に引き継いだ。自己責任という言葉がもった含みは、「聞く耳を持たない者は、自分がどんな風にもまくやれるかを経験しなければならぬ」である。当時、多くの人々がうなずきで応えたことが、ますます、一般の市民の現実となった。

## 九 ネオリベラリズムとナシヨナリズム

国家主導による、故郷を思う民族の気持ちの喚起と、それと同時に、制止されないネオリベラリズムによる地域の弱体化と崩壊。この間にある矛盾を、こばやしよしのりは再三指摘する。

こばやしの民族主義的な考え方に疑念は大いにあるが、彼は、ヨーロッパと比較するとまったく異なる条件下<sup>21</sup>にあって、日本でも明治時代から次第に広まってきた市民イデオロギーの根本的矛盾を気づかせる。

21 ヨーロッパと違って、国民国家としての意識は、市民運動の自由主義的努力とは結びついていない。日本で明治時代以来からの国民国家は、最初から、国家を主導・形成した寡頭制の支配下にあった。民主主義的なきざしは寡頭政治に、萌芽の段階からつぶされた。それでも、遅くとも大正時代からは、社会で優勢な市民思想が形成された。それには、民族共同体という方向づけがある、日本の特色のファシズムが、少なからぬ関与があった。ドイツでも第三帝国でようやく階級社会が破壊され、市民イデオロギーが続いて受け容れられたことは、まさに歴史の皮肉である。

このイデオロギー本質は、市民層の自由主義的な要求が、相互の経済競争の中で「個々の」個人の社会的上昇と緊密に結びついていることである。全体の調和は、市場という制度を通じて作られる。市場では参加者は、どのような種類のものであれ、力の均衡にたどり着く。これが市場信仰

である。明らかであるのは、そのように欲された調和が、結局のところ、依然、抽象的で、解釈が必要なことであることだ。この市場信仰は、「形式上の均衡は、常に内容的にも全体の公正さと理性として実現される、という主張」により、疑わしい (Schäuble 1984年26)。

22 美学と市民社会というテーマについては、まったく異なる研究分野の著書を参考にした。市民社会における市場原理を非常に具体的かつ明快に述べている。

この幻想に、いわゆる西の世界は、冷戦終結まで身をゆだねることができた。自由、つまり表現の自由、市場の自由、自己実現の自由 (要約して「自由世界」) が共産主義 (冷戦時に多くの保守の人々、中にはロナルド・レーガンにも見られ、呼ばれたように「悪の世界」として) との対立関係により、一連の価値と結びついている限りでのことであつた。一連の価値とは、個人が、自分の行動について積明する必要なしに、日常生活でそれと断固として一体化ができるものである<sup>23</sup>。正しい側にいるという気持ち (本来それに値しなかったが)、長い間社会の矛盾を覆い隠していた。

23 例えば、奇跡の経済復興神話を持つドイツの場合のように。多くの西ドイツ人が (怠惰で小さい東の兄弟) を残念な思いで眺めつつ、その神話を行動力、粘り強さ、未来志向などのドイツ人の美德の結果と当時みなしたがった (今も少なくない人がみなしている)。

その矛盾は、遅くとも七〇年代から（石油ショック、失業率の上昇）は西欧先進諸国でも見逃せなくなった。そして、ベルリンの壁の崩壊以降、西側システムの勝利を祝う酔いがさめたときには、一九九〇年代の後半に、経済と政治の強まるグローバル化の趨勢の中で、深刻なアイデンティティ危機へとつながった

今や人々が気づいたのは、自由市場を超える価値を育ててこなかったことである。たえず変化する社会で個人がそこへ逃げ場を見出せた価値である。自由市場は今ではどこにでもあった。もはや西側の独占権ではなく、一般的なものの、世界の財産となった。

各国政府はこの潮流に逆らわなかった。彼らの安定性は、ますます、経済領域での「地球規模でのプレイヤー」に依存しているからである。この人たちは、倦むことを知らずに、中進国の競争が激しくなっている状況にたいして柔軟な対処が必要であると指摘する。国家に最終的に残るのは、経済に柔軟な企業政策への手段をゆだねることだけである。

これまで国家の責任にあった社会の分野が民営化されるという趨勢も、より多くの市場を作ったし、作っている。しかしそれは、まさに市場というものがプラスの結果をもたらすという、人々の考えが消え始めたときのことなのである。市民社会の基本的コンセンサスは、市場に関する個人人の私的な関心は、社会の全般的なことと結びついていることであった。そのコンセンサスは根拠が奪われ、見せ掛

けの性格が明らかになる。価値の空白を満たしたいという普通の人々の気持ちは、結果として民族的Nationalなものに向かう。激しく競争している世界市場では、まさに企業の自身の利益になることは、自社の製品が気づかれ、他の企業と区別され、まごうことない独自の個性を持つことである。そのとき、製品で愛国のnational性格を強調することは、はっきりした個性戦略として適していて、国際競争だけでなく、国内nationalでもそうである。

まごうことない独自性としての民族的なものへの欲求は、国、地域、個人レベルにおいても、それ自体は価値を意味しないグローバル化に対する主張戦略でもある。これは矛盾する過程である。民族的nationalなものは、グローバル化の時代にコンタクトを失わないために、国外・国内市場で個性化として役立つ。他方でそれは、市場の原理を根本的に問題視する、反グローバル化運動の精髓でもある。この資本主義批判では、左右の立場は一致する。ところでそれは、世界規模の反米国主義現象でも同じである。

こういう状況は、右派の現在の日本論議の確固たる構成部分でもある。これは自明なことではない。ヴォルフガング・ザイフェルトが、そのナショナルリズム論考で述べているように（Seiffert 1977年213）、まだ一九三〇、四〇年代にははっきりと認識できる民族主義者Nationalistの資本主義批判の傾向があった。ところがそれは、戦後は、民族主義の基本的立場と、実際、終戦からは無敗で政権にある自民

党の基本的立場が次第に接近しているために、目立たなくなつたという理由からである。

このことは結果として、ある程度まで非政治的な、わずかに文化面でだけ議論している民族主義論議となつた。それは政治体制の変革を求めない論議である。人々はその体制を、これまでそうであつたように、民族主義者の最大の敵である共産主義に対抗するとりでとして理解したのである(ザイフェルト 1977年 224以下)。

## 十 愛国心と過去の克服

現在は、資本主義の危機、または自由市場経済の危機について語ることはできない。それに取って代わるものがないからである。しかし、確認できることは、資本主義によって引き起こされた「意味の欠如」であり、安心感を与えてくれる共同体感覚への憧れである。

様々な著者が、それに対して答えようこころみ、市場原理の優位に無愛想な批判を行つていても、全体に関わる「意味危機」を取り除こうとしての彼らの諸提案は、この原理を問題視するものではない。

明らかになるのは、彼らが、もはや機能しなくなつていく「幻惑の関連」(社会主義独裁という悪に対し、自由市場において、活路を開くと勘違いされた民主主義という善)に代わり、仮像への古い市民的憧憬に奉仕する、意味付与

の新しい神話(エトスに基づいた共同体という神話)を宣伝していることである。

家族と故郷という、無垢であると誤解された概念をめぐつてなされる愛国心要求、日本人の感情に訴える愛国心要求の目的は何か? これとの関わりで再三出てくる、「安全」や「保護」という概念は、愛国主義者たちが目指す方向を示唆している。地球規模で作戦行動を取るテロ行為の後では、保護と安全を求める一般に増大した欲求は、日常での新しい確固とした意義としてもう軽視できない。そのことが、愛国心論争の重要な前提の一つである。

しかし、個人が「一つの」特定のグループ、組織または地域への、不可避と思われていた帰属を指摘することで強調されることは、帰属の対象を守りたいという「自然な」欲求である(安倍 2006年97)。もう長いこと保守派と反動派が、激しく日本国憲法の改正(と特にその中でも日本の自衛隊に関する第九条(軍事力の拒否))を求めていた。その関連で、故郷と愛国心への信仰告白の後ろで、「普通の国(家)」へ向かうという、非常に具体的な政治目標が姿を見せている。すなわち、経済力にふさわしい政治的・軍事の影響力をグローバル・レベルで持つ国家としての日本の承認である

24 ドイツがどの程度そのモデルになったのかは、ここでは議論できない。また論争でも影響をおよぼさない。ドイツは過去の罪を背負ったNation国家で、それが軍事的な意味でも「普通の国」になった。そういうドイツ

を模範とするならば、隣国との清算に至るためにしてきた努力の違いについても語らねばならないだろう。この比較には、日本外交の不足が論議されねばならないだろう。そこには、ホロコースト対日本軍の戦争犯罪、ヨーロッパと比較し得ないアジアでの政治状況との違いはあるのだが。

そして、ここで円環が閉じる。国家と過去をテーマとした贅沢に製作された戦争映画が増大している。それらの映画では、家族、故郷、祖国のための犠牲者が視野に入っている。その増大が示すのは、一九九〇年代から保守・反動的組織が、新しい民族的な national 物語に共に取り組んだ様である。それらの物語では、第二次世界大戦に対する肯定的見方が優勢である。アジア諸国の犠牲者はほとんどもう視野に入らない。

25 数少ない反戦映画や、過去を批判的な観点から描き、現在において過去を検証する映画は、古典とも言える「行き行きて、神軍」(1985年)のスタイルでの、通常、少ない資金で製作されたドキュメンタリー映画である。こういう映画は、問題意識の高い映画館で一度、二、三週間も上映され、多くの観客に見てもらえない。「蟻の兵隊」(2006年)は、言及する必要のある近年制作映画の一つであろう。

一九五〇年代以降、文学、コミック、映画でのストーリーが、アメリカとの軍事的対決に集中していることは、別の寄与をしている。それは、アジアでは、装備の劣った敵に対する陸軍の進出であり、他方、太平洋の前線では、

海戦、空中戦、玉砕や島の防衛という形での、圧倒的優位な敵との犠牲の多い戦いであるという、戦闘行為の性格にも認められてある。言い直すと、わかりやすく表現できる英雄叙事詩<sup>26</sup>である。

26 よりによってクリント・イーストウッドが、硫黄島映画第二部で、似た態度をとっているのは、現在、緊密な同盟国(日本)へのアメリカの政治的配慮からか、テーマへの洞察不足からか、としか筆者には解釈できない。アメリカ側からこの戦闘を描いた硫黄島映画の第一部は、ずっと社会批判的な姿勢をとっているとと言える。

教科書もこの点では一方的で、写真を使い、レトリックを用いて敵国アメリカ(原爆投下、沖縄戦、東京空襲)を強調している。それで、多くの若者たちには、日本がアジアで残酷な戦争を行ったことが、全然正確には意識されていない。

27 この歴史教科書の中身と影響がいかに少ないかは、石原が引用した逸話が伝えている。戦争そのものの詳しいことを知らない若者の無知がはっきりしている。ある元軍人が石原に、車中で二人の若者の会話を伝えた。

「おい、聞いたか? 五〇年前日本とアメリカが戦争したんだってよ!」「なんだって? おまえからかってんのかう?」「ちえっ、ほんとだってば!」「まじ? それでどっちが勝ったの?」(石原 2006年113 原文を要約)

歴史教科書に、誤って考えられた、自虐的な歴史理解に、右派から激しい批判がなされても、気づかねばならないの

は、第二次世界大戦後、日本人自身を戦争の犠牲者という型にはめる傾向が持続していることである。ごく手短に言うると、日本による戦争犯罪やジュネーブ協定違反、ハーグ陸戦条約違反を指摘する、しばしば注に移された箇所は、防衛戦争という全体の印象を根本的に妨げない。現政府の（特に安倍個人の）政府の意思に従って、学術的にまだ百パーセント証明されてない、高校歴史教科書からの箇所は、今後、削除されるという。その箇所に入るのは、沖縄で民間人への集団自決の軍による命令、従軍慰安婦組織への軍の関与である。

かなりの歴史教科書が、評判の良くない「作る会」<sup>28</sup>の教科書の認可後、先に立って従順になり、国の次の教科書検定のために従軍慰安婦の記述をすっかり削除し、元々わずかな南京虐殺事件の記載をさらに減らした。

28 注11を参照。

政府の意図は明確である。日本軍の印象を、過去の場合も改善しようとするのである。若い兵士らの倫理的な模範的行動、士官たちの責任感のある決断を強調することで、あの戦争をより明るい光を浴びて登場させようとする。現在の日本（とその軍隊）と進んで一体化するのに、邪魔になるものはない。

これまで日本で憲法改正動議には、国民からよい反応がなかったが、アンケート結果は、賛成の数が増えたことを

示している。二〇〇一年には一七パーセントだけが、憲法第九条の変更に賛成した。二〇〇四年にはもう三一パーセントに増えた（香山 2004年168）。

## 十一 「現実政策」の優位

精神科医の香山リカは保守の側から激しく敵視されている。彼女は、数多くの著書やテレビへの登場で、社会がますます保守化の傾向にあることを批判している。彼女の目には、世論の急激な変化は、既成事実を積み上げてきた政治により実現したものである。

国民の気持ちは、事実が変わることで変化する。政府はこのことを知りながら、内政外交の措置を講ずる。自衛隊のイラク派遣と小泉首相の靖国神社参拝もこのことを明確に示した。既成事実の前に立たされた後では、国民の賛同はすばやく高まった。

現実の変化にたいするすばやい適合は、流動性の高まった社会では必要である。しかし同時に、香山が気づくように（香山 2006年156）。それによって、平和、自由、平等、人権のような理想は、現実政策に対しては守勢にまわっている。

若い人々も、社会全体のように、自分の将来に対する不安をおぼえている。他方で彼らは、やりたいことをやる自由がある。そのため、彼らが唯一努力することは、この社

会で居場所を見つけないことである。より良い社会を作るための自主的行動は、ごくわずかの人々にしか思い浮かばない(香山 2004年54)。別の言い方をすると、若い人々は公正な社会に関心はない。彼らに対して公正な社会への関心しかない。彼らの私的関心領域外にある問題にいたっては、まったく視界に入らない。

こうした姿勢は、もちろん保守的な社会批評家には、西欧化とゆとり教育によって生まれた「今どきの若者」のエゴイズムを嘆ききかけとなる(いつでも、保守的文明批評者の気に入りの主題である)。けれども、若者たちを「郷土愛国主義」のかけこみ標的にしているのは、まさに社会批判的な意識の欠如であり、政治への無関心である。

社会での居場所探しにおいて、彼らはその郷土愛国主義を、家族、故郷、国家へ「帰属していること」それだけにやって持っている。したがって、万一の場合にはそれを、社会を相手にしても戦い取らなければならない必要性はもうない。流動性が高く、見渡しがきかなくなった世界にたいしては、不動の理想が対置<sup>29</sup>される。

<sup>29</sup> 筆者自身の教員としての経験からも判断するのだが、卒業後に故郷に帰り、故郷の家族のふところ、慣れた環境におさまって、職業生活に入る学生が増える傾向が実際ある。これは、特に東京のような大都市では違っているかもしれない。けれども、日本の文化・社会での主要都市偏向にもかかわらず、大半の大学は、県庁所在地かその周辺にある。そこでは地元の高専卒業生やその他の県から来た者たちが学んでいる。

出される問いがある。若者のますます保守的な生活態度。愛国的感情への支持表明。香山が「プチ・ナショナリズム」(彼女の著書の一つは表題が『小さな民族主義』。香山2002年)と呼ぶものを越えている、「日本的なもの」をおしゃれだと思ふ若者たちの、少し排他国粹主義的な徴候。これらは、どの程度のものなのか。将来ここに実際に、本物の民族主義Nationalismusの危険が見ることができるとかである。

ドイツでも二〇〇六年の一連のサッカーワールドカップでは、新しい、陽気で、「健全な」愛国心が口にされた。これは、政治で獲得された正常性にならって、ドイツ国民の精神が正常であることのしるしと解釈<sup>30</sup>された。

<sup>30</sup> 国際スポーツ試合や国内の祝賀(10月3日のブランデンブルク門前など)の他は、普段の日常生活でドイツ国旗を見ることは、(筆者自身はそのような機会に国旗を振ることは理解できないが)、八〇年代(ヴァイッゼッカー演説、平和運動、フィッシャー環境大臣、ダニエル・コーン＝ペンデットと『フラスターシュトランドPlasterstrand』\*等)にフランクフルト周辺で政治意識に達した者である筆者には、はっきりした不快感を引き起こす。(一九七六から九〇まで二週間毎か月刊で出た、コーン＝ペンデット編集のフランクフルトの都市雑誌。特徴は、音楽、映画、演劇、政治・文化・児童関係の行事開催カレンダー)

日本では、愛国の感情を発散させることは、スポーツ大会

に限られているようである。日の丸は、国民の national 祝日に、どちらかというと、わずかに一般市民が目にするだけである。学校の学期開始か終了式典でか、極右の街宣車に見られるのみである。故郷との強い結びつき、郷土自慢や日本人であることのより強い自覚は、まだ安倍や藤原、石原、こばやしのように、自称愛国主義者と宣伝するようなどころまで行っていない。まだ、自分の個人的欲求と希望のほうに、国家より上に置かれている。

## 十二 犠牲になるといふ考えの回帰

大半の日本人には、国のために犠牲になることを甘受するという気持ちがない。このことが、日本国憲法の第九条改正へのためらいがちの同意にたいする主な理由の一つと見なければならぬ。平和維持活動のための自衛隊派遣は、損害を受けることなく活動を終った試みだった。しかし、第九条の改正と、きつと政府が将来構想していたような、戦闘行為へ加わるためには、国民の心理的気質が変わらなければならなかった。右派の雑誌、戦争賛美の映画、こばやし流の情報宣伝活動の努力は、この関連で見られねばならない。

安倍が犠牲というテーマに対しどんな態度なのかを、その著書『美しい国へ』ではっきりさせている。彼は第二次世界大戦との関連で保守的な作家、神坂次郎を引用する。

神坂は大戦で犠牲になった人を平和、繁栄、故郷のいとしい人々を守る目的のためであると、好ましく評価している(2006年107)。

安倍はこれに次のようにコメントしている。

私もそう思う。だが他方、自らの死を意味あるものに、自らの生を永遠のものにしようとする意志もあつた。それを可能にするのが大儀に殉じることではなかったか。彼らは「公」の場で発する言葉と、「私」の感情の発露を区別することを知っていた。死を目前にした瞬間、愛しい人のことを想いつつも、日本という国の悠久の歴史が続くことを願ったのである。(安倍 2006年107)

この考え方は、他ならぬ最悪のたぐいの修正主義としか呼べない。それは、その語彙を見ると胡散臭く、日本軍国主義のプロパガンダ(「アジアの繁栄圏」等)を思い出させる。安倍はこの思考を現代に適用し、次のように考える。

たしかに自分のいのちは大切なものである。しかし、ときにはそれをなげうっても守るべき価値が存在するのだ、ということを考えてことがあるだろうか。わたしたちは、いま自由で平和な国に暮らしている。

しかしこの自由や民主主義をわたしたちの手で守らなければならぬ。そしてわたしたちの大切な価値や理想を守るとは、郷土を守ることであり、それはまた、



愛しい家族を守る)こともあるのだ。(安倍 2006年108)

社会政治的理想である「自由と民主主義」、他方で「家族と故郷」という、まったく異なる前提に基づく概念が直接に関連させられる。こういう関連は、ここでも、その本の中でも明らかでない。よく考えず、伝統的・民族主義の立場から国家と国民を同一視していることを、元々、示しているだけである。安倍が、大戦犠牲者への説明で引き合いにだす、特攻隊のパイロットたちの「大いなる目標」(または「正しい事」)は、詳しく説明されていない。それは、最終的には、国の防衛に他ならない。したがって家族と郷土の拡大に過ぎない。すなわち国民を拡大して表現したものである。国民そのものより高い価値は、どこにも明白でない。その他の点でこの本でほとんど詳しくは説明されない、民主主義や自由のような理想は、この関連では、口先だけの信条表明にとどまっている。

藤原は、政治的に正しくあろうとはまったく努めない。彼は、平等、自由、民主主義を、単に日本にとって矛盾しない西洋的価値とみなしている。それらは西欧でも機能していないから、大きなこけおどしにすぎない。藤原は、武士道精神を、日本だけでなく世界中での、グローバル化の問題の解決策と見ている。安倍と違い藤原には、犠牲者は彼によって宣伝された、犠牲となる覚悟がなければならぬはずのエリートを顧慮してのみ視界に入ってくる(藤原

2006年84)。

にわかにはつきりするのは、藤原が理想とする社会は明治国家であることである。そこでは、武士階級が近代の政治的エリートや上級官吏に姿を変え、国の運命を支配した<sup>31</sup>。31 昭和時代によく、対中国の威厳のない戦争をしたことで、対等の敵と戦うという武士道精神は無視され、伝統的価値基準の終わりの始まりとなったという。こうした考えがまったく非歴史的であり、明治の専制政治の植民地主義的野心と軍事的傾向を無視するだろうことは、疑問の余地がない。

武士道精神を土台して成り立つ、新しい階級社会という観念は、政治的にやり遂げることはできない。この本がベストセラーになったのは、そのためではない。本の人気の理由は、おそらく、それを使って、「あたらしい不透明性」(ハーバーマス)から身を守ることできる集団の感情的価値よりも、「日本的なもの」の復活との関係で見られるべきである。

姜は著書『愛国の作法』で、犠牲の問題をより詳しく扱っている。犠牲は靖国神社、広島、長崎での原爆投下との関連でも考えられなければならない。またそれは、おそらく、保守的日本人の歴史理解の本質である。姜は、過去の犠牲者たちと現在に生きている(残った)人々の関連に、鏡像のような関係を見ている。日本のために進んで自分を犠牲にする兵士は、その行為を(生き残った人々、その後を生

まれた人々の) 国の理想的な将来に投影し、その行為の意図によって、後に続く世代に立派であると証明される。逆に、生き残った者や後に生まれた者たちは、この「無私の」行為に意味を与える。それらの行為が無駄ではなかったとするためである。生き残った者たちは、自分たちも、犠牲者を祀り、彼らの行為の記憶を継承し続けることによって、過去の犠牲者たちに尊厳ある存在であると証明しようと努める(姜 2006年168)。

彼らが過去の精神を保持し、その精神の中で、純粹なもの、民族Zationの善なるものの精髓を(そして、あやまちや違反ではなく) 続く世代にも伝えることによって、自分たち自らも国の将来のために「正しいこと」をすることになる。

すでにニーチェは、歴史主義に関する有名な論文「生に対する歴史の利害」で、歴史の優位について書いている。そこで彼は、人は歴史的責任の中に立っており、その歴史をもとに、自己の行為を測ることを批判し、歴史からの切り離しを求めた。過去の悪行を繰り返さないために、あるいは今度は正しいことをするために、歴史から教訓を引き出すこと。すなわちそれが、過去の克服の場合の共有財産となった。そしてその記念日には、その教訓がまさに決まり文句のように繰り返される<sup>32</sup>。

32 マルティン・ヴァルザーは、その有名で悪名も高い演説で、これを「口先の祈り」と呼んだ。この演説がある程度、ドイツでのパラダイム転

換の始まりをまっぴり表している。日本で「戦争論」と「プライド」も同年の一九九八年に発表されているので、このことは確実に偶然にすぎないが、第二次世界大戦での両加害国の見方の変化の始まりが、相対的に見ると同時であるということではない。

### 十三 展望

しかし「正しいこと」とは何か? それは、ドイツでは一九七〇年代以降、赦しを請うこと、加害者であることの認識、「他者」の受難の優位であった。一九九〇年以降は(一九五〇年代同様) 再び、「自分が」犠牲であることの強調だった。それは、わけても、加害者国をめぐる論議が行われなかった、新しい州(東部ドイツの諸州)の影響を受けてであった。日本で行われる戦争についての物語は、いつも、空襲で苦しんだ民間人の、下からの観点からであった。広島や長崎で毎年行われる祈念式典は、追悼ミサの性格を持ち、そこでは世界中の平和に祈りがささげられる。戦時中(それが語られる、そのほかの場所(博物館、公立教科書)でも、この戦争が、アジアで荒れ狂った日本軍ぬきで実際に行われたとする、すこぶる奇妙な現象がある。日本の罪(それを認めることが左派からは再三求められている)を少しずつばやかすことは、平和を熱心に希求すれば埋め合わせできると人々が考えている。

しかし同時に、甘受しなければならぬのは、軍の関与を

反省するのを放棄する場合は、兵士として犠牲となった若者について語ることも、同様に、無視せざるをえないだろうし、それは、右派からは決して受け入れられなかった事実である。これまで歴史教科書に掲載された公式の歴史記述は、誠意に欠けた妥協の産物であった。そこでは、戦時中の乏しい事実が大変重要とされ、戦争の全体像、特に価値観の保持伝達はまったくなされていないという点でそうである。右派が「自虐的な歴史理解」と呼ぶものは、基本的には、左派が日本の罪を一生懸命強調したことを批判している。

受動的犠牲にそういう強調がなされたことは、実際、そもそも自己糾弾めいたところが少しある。

それゆえに、こういう歴史像を修正する右派の努力は、能動的犠牲者の肯定的強調、すなわち英雄的で兵士らしい無私の行為をめぐって行われている。一九九〇年代まで、政府は安全保障面で依存した（今もいる）アメリカに配慮して、戦争をこのように見る見方を抑圧していた。有罪判決を受けた戦争犯罪人。特攻隊パイロット。彼らを国家によって制裁を受けた歴史の英雄として祀ることは、疑いなく両国関係に苛立ちをもたらしたのであろう。そういう風にして、日本では最少公分母の「平和」<sup>33</sup>に合意したのである。<sup>33</sup> 疑いなく、自衛隊のイラク派遣は、日本がこの点で「兄のアメリカ」にこれまでの配慮をしなくてもすむようにすることに貢献した。

しかし、価値伝達を意識的に断念している公的歴史描写（軍国主義の愛国教育から引き出した教訓）の陰では、一九五〇年代から、ある種の対抗文化が一般に認められるようになった。この文化は、コミック、B級映画、軍事雑誌、右派のオピニオン雑誌、戦争博物館としての遊就館、右傾化した日本論議で、戦時中のプロパガンダにつながる英雄賛美を行った。確認できるのは、この論議が一九九〇年代から、そのサブカルチャーらしい性格を失い、しだいに、「没価値」か、民間人犠牲者に偏重した歴史描写と交代することである。まだ日本では平和であるが、石原によればむしろ「平和すぎる」（石原 2006年114）。

<sup>34</sup> 同じページで著者は「平和の毒」という言葉も使っている。

そして戦争に巻き込まれることを具体的に想像することには、国民の大半は、まだついてゆけない。

国内の右派勢力は、一步一步、社会の情報伝達（メディア、娯楽、教育）のすべての重要分野で影響を及ぼした。過去やアイデンティティについての論争を扇動し、そうして政治議論の方向を決めているのは彼らである。憲法改正に関する議論は、その際もちろん第九条が注目の的だが、すでにかんがりの時間がかかっていて、まもなく議論が白熱するときにやってくるだろう。自衛隊が正規軍に変えられるのも、時間の問題に過ぎないだろう。徴兵制は現在議論になっていない。けれども、永遠のタブーというわけではない。

## 訳 翻

安倍はその本で、共同体意識や郷土地域に対する責任感を強めるために、高校卒業から大学入学までの間に社会奉仕することを提案した。この奉仕義務期間がわずか二ヵ月ほどであるとしても、この考えはドイツの民間奉仕義務と似ていなくもない。これは野心のある政治家の思考遊戯であり、安倍はそれが、若者たちのエゴイズムを嘆く人々によって共有されることを知っている。

35 この間に安倍は、就任後ギリギリ一年で辞任した。その高い理想を掲げた政治が、国民の日常的な財政面の懸念にたいして感覚を十分に示さなかったからである。一連の資金スキャンダル、政府内の軋轢、閣僚の自殺、特に年金問題があった。年金問題では、政府と、特に安倍が、議会<sup>35</sup>で高慢さを見せ、国民がこれに理解を示さなかったためである。そういうことの結果、2007年7月29日の参院選で類を見ない大敗に至った。連立与党である公明党とで占めていた過半数議席を失った。同選挙後の安倍の人前での態度から、かなり参っているのではとの推測がなされた。内閣改造後も財政スキャンダルは止まず、自衛隊による米軍船への給油活動に対する支持を野党が拒否したことが重要な引き金となって、安倍は辞任した。

次の論理的段階は徴兵制の導入であろう。これはドイツや韓国、朝鮮、中国などの諸外国にもある。そして自分で核弾頭を持つことは、何人かの日本人政治家がすでに一度は考え始めたことである。ここでも将来は、幅広い議論が始まるだろう。

こうした政治的決断には、教育基本法の改正、愛国心論争、戦争映画などは、右派の政治家、芸術家、メディアの結集した行動の試みが成功したと言える。それは、すすんで防衛する覚悟がある保守的価値観を持つ民族共同体となる、日本国民の素因にとってである。しかしこうした推移が、「普通の国」<sup>36</sup>になろうとする日本の努力に有益かどうか、そしてそういうやり方で中国、韓国、あるいはアジア大陸そのものとの関係が改善されるかどうかは、たいへん疑わしい。

36 右派の日本論議には、偏狭な愛国主義の強い傾向がある。これは、日本の文化的国粋主義的特性をはっきり示す。これは、ある意味では、ハンチントンによって、その世界の文化的分類において確認されている。たとえば藤原は、日本が「普通ではない国」になることをはっきりと望んでいる。

参考文献 日本語書籍の出版地は東京。

安部晋三：『美しい国へ』文藝春秋2006年

朝日取材班：『過去の克服愛国心―歴史と向き合う2』朝

日新聞社2007年

石原慎太郎：『若者がこの国を愛するために』文藝春秋

2006年7月、110-117頁

藤原雅彦：『国家の品格』新潮社2006年

姜尚中：『愛国の作法』朝日新聞社2006年

- 香山リカ：『みぢナシヨナリズム症候群』中央公論社2002年
- 香山リカ：『「私」の愛国心』筑摩書房2004年
- 香山リカ：『みぢナシヨの「常識」』岩波書店2006年
- わくすた2007年2月 (vol. 21)
- Barthes, Roland (1964), *Mythen des Alltags*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp (=edition suhkamp 92)
- Berndt, Jaqueline (2003), Eine zeitlos schöne Nation: Das "Neue Geschichtslehrbuch" als Bildergeschichte, in: Steffi Richter, Wolfgang Höpken (Hg.), *Vergangenheit im Gesellschaftskonflikt - Ein Historikerstreit in Japan*, Köln: Böhlau 2003, S. 191-217
- Morris-Suzuki, Tessa (2003), Globale Erinnerungen, nationale Darstellungen: Nationalismus und die Revision der Geschichte, in: Steffi Richter, Wolfgang Höpken (Hg.), *Vergangenheit im Gesellschaftskonflikt - Ein Historikerstreit in Japan*, Köln: Böhlau 2003, S.27-54
- Scheible, Hartmut (1984), *Literarischer Jugendstil in Wien*, München: Artemis
- Seiffert, Wolfgang (1977), *Nationalismus im Nachkriegs-Japan - Ein Beitrag zur Ideologie der völkischen Nationalisten*, Hamburg (=Mittellungen des Instituts für Asienkunde Hamburg Nr 91)
- Yoshimi, Shun'ya (2003), *Zeitschriftenmedien und der Konsum von Nationalismus*, in: Steffi Richter, Wolfgang Höpken (Hg.), *Vergangenheit im Gesellschaftskonflikt - Ein Historikerstreit in Japan*, Köln: Böhlau 2003, S.55-70
- ☆本稿は、マンフレート・ポール、イリス・ヴァイチェンホフ編集『日本二〇〇七 政治・経済・社会。三〇周年記念号』（社会科学的研究学会 2007年論文集、69-86頁）に掲載された。原題は「Die Ästhetik des Opfers: Annäherungen zur jüngsten Patriotismusdebatte in Japan」〔犠牲の美学 ―日本における最近の愛国心論争の考察〕。独文で書かれ、かつ発行地がドイツなので、多くの人々には目に触れづらいことを考え、今回、大澤隆幸の協力で翻訳した。
- Nachkriegs-Japan - Ein Beitrag zur Ideologie*